

茅 風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2010年4月24日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信33号

速報：4月17日、野焼きを実施しました（詳細は次号）

□「総会」報告：新しい10年がスタートしました（事務局）……1
・新しい10年：活動の基本方針と目標
・2011年度の主な活動計画・日程：新規プログラム目白押し！
・新規プロジェクト「藤原エコビレッジ」のご案内
・会員規定の改定：準会員（一般）の新設
・新年度幹事の顔ぶれ：ニューフェイス誕生で若返り
◆「自然保護協会沼田真賞」を受賞しました（稲 貴夫）……5
◆沼田賞受賞記念「草原再生セミナー」報告（海老沢秀夫）……6
「ポストCOP10：生物多様性保全のための地域戦略のあり方」
□2010年度講座「コモンズ村ふじわら」⑦ レポート……7
・大地のいぶきが私を呼ぶ（古高利男）
・棚から「ぼた」もちーたな「ぼた」（高橋志津子）
□「会員・会友」便り ……………9
・連載『古民家再生奮闘記』⑤（北山郁人）
□参加者募集のご案内（事務局）……11
・2011年度講座「コモンズ村・ふじわら」②（5月14日～15日）
◆編集後記～塾長のつぶやき～ ……………12

■ 第10回「総会」報告：新しい10年がスタートしました

事務局

- 当塾は昨年10月、発足10周年記念フォーラムを開催し、これまでの経験と学びを『多面的価値のある草原を持続的に保全する仕組みの構築』としてまとめ、発表させていただきました。幸いにも、この記念すべき節目の年に、「日本自然保護協会沼田真賞」授賞の栄に浴しました。授賞理由は「茅場という二次草原を文化と生物多様性の両面から再評価し、流域ネットワークを通じて保全する先駆的・モデル的活動」とのこと。過分のご評価をいただきました。（5頁ご参照）
これ一重に、地元ならびにみなかみ町役場をはじめ、多くの会員・会友の皆さまのご理解・ご支援の賜物であります。この場をかりて厚くお礼申し上げます。
- そして本年4月2日、第10回「総会」を開催し、次の「新しい10年」のスタートを切りました。この間の目標は「人と生き物が入り会うコモンズ村・ふじわら」づくり。利根川水源地域の環境資源がもたらす恩恵（生態系サービス）を末長く持続的に利用する仕組み。恩恵をうける流域の住民や企業、関係セクターの皆で支える「流域コモンズ」の構築です。今後とも、変わらぬご支援お力添えをいただけますよう、あらためてお願い申し上げます。
- 「新しい10年」の活動の基本方針・目標は要約、下記の通りです。

これからの10年：活動の基本方針/道しるべ

- | | |
|--------|--|
| ・何をするか | ： 「水源地域の環境資源の恩恵（生態系サービス）を持続的に利用・管理する仕組み」づくり |
| ・具体的には | ： ①元・入会山（ススキ草原とミズナラ林）の再生と活用
②古道の再生と活用（→フットパス）
③古民家の再生と活用（→教育旅行、エコビレッジ） |
| ・どのように | ： ①利用の促進（特に、新用途開発）と管理の徹底
②新たな担い手の確保 ・老→壮→青（手をつなぐ）
・点→線→帯（利根川流域コモンズ） |
| ・合言葉は | ： 『飲水思源』 |
| ・目指すは | ： 人と生き物が入り会うコモンズ村・ふじわら→地域のにぎわい |
| ・モットー | ： 楽しみながら良い汗をかきましょう！ |

1. 2011年度の主な活動計画・日程 : これまでにない新しいプログラムが目白押し! (3頁ご参照)

- ―「新しい10年」がスタートする2011年度の主な活動計画・日程は3頁をご覧ください。環境資源の利用を促進するための新しいプログラム(〇〇〇〇表示)を沢山盛り込みました。
- ―それぞれの活動・イベントの参加者募集案内は開催予定日の1ヶ月前を目途にお届けします。面白そうなプログラムがないか、あらかじめチェックして予定に入れておいてください。

2. 新規プロジェクト「藤原エコビレッジ」のご案内 (4頁ご参照)

- ―空き家になっている古民家が集落のあちこちに数多く見られます。このまま放置しておくと、人知れず雪に埋もれやがて土に還っていきます。これを、持ち主の許可を得て再生し農村文化体験や教育旅行の受け皿として活用すべく、昨年度、地域の実態調べや古民再生セミナーを実施しました。
- ―その結果を踏まえた発展プログラムとして、「特定された古民家を中心として、その周辺の田畑や用水路、雑木林などを含む里山環境の再生と持続的利用」を試みます。これまで同様、地元のご理解・協力を得つつ、早稲田環境塾ならびに地球環境基金との協働活動として取り組みます。有志の参画を歓迎します。

3. 会員規定の改定: 準会員(一般)の新設: 入会のお勧めがしやすくなりました

- ―これからの10年の持続的活動を展望して、これまでの会員規定を見直し・改定しました。これにより、新しい会員区分は以下の通りとなりました。

正会員	入会金1万円・年会費5千円 議決権有り
準会員[一般]	年会費3千円 議決権なし
協賛会員	年会費1口・1万円 議決権なし
家族会員	年会費1千円 議決権なし
準会員[学生]	年会費1千円 議決権なし
メルマガ会員	年会費無料 議決権なし



- ―議決権以外の権利は平等です。入会金・年会費の負担を軽くし、入会していただきやすくなりました。お友達や身近な方々に、「飲水思源」仲間になっていただけるようお声掛けしてみてください。

4. 新年度幹事の顔ぶれ: ニューフェース誕生で若返りました!

- ―活動推進の裏方を務める幹事団の若返りを図り、同時に重点事業・課題別の役割分担を明確にしました。
- ―〇〇〇〇表示は新任です。一同、精一杯がんばります。ご支援ご指導の程よろしくお願いいたします。

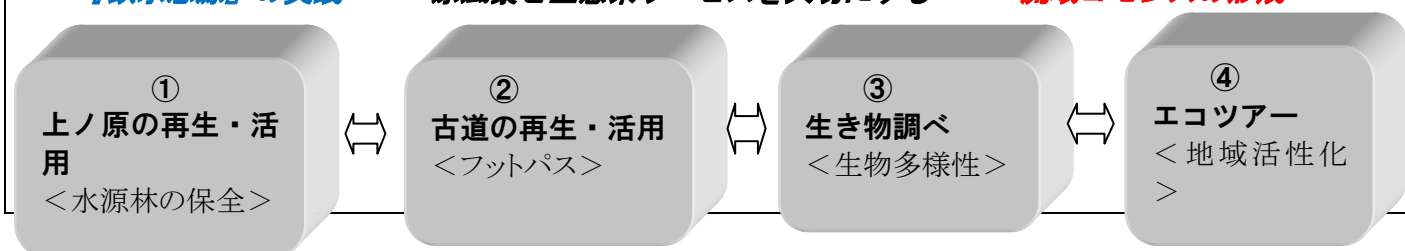
- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| ・浅川 潔 (幹事/事務局長～企画・予算統括) | ・草野 洋 (塾頭/統括補佐～流域コモンズ) |
| ・石原光訓 (幹事～学生部代表) | ・清水英毅 (塾長/全般統轄～連携グリップ強化) |
| ・稲 貴夫 (幹事～啓蒙・情宣) | ・高野史郎 (幹事～自然ふれあい環境学習) |
| ・井上康之 (幹事～会員・広報) | ・湯本信康 (幹事～自然ふれあい環境学習) |
| ・海老沢秀夫 (幹事～講座「コモンズ村・ふじわら」) | ・吉野一幸 (幹事/地元代表～ビデオ制作) |
| ・岡田伊佐子 (幹事～自然ふれあい環境学習) | ・林部良治 (監事～会計) |
| ・北山郁人 (幹事/水上事務所長～藤原エコビレッジ) | |

以上、13名

2011年度の主な活動計画・日程

	講座「コモンズ村・ふじわら」	自然ふれあい学習 古民家再生、ほか	幹事会／学習会 地元行事、など
4月 ～ 6月	① 4/16（土）～17（日） ・「山の口明け」行事 ・野焼き ・侵入木の除伐 ② 5/14（土）～15（日） ・古道「青木沢峠」のフットパス歩き ・春の生き物調べ&キノコ原木玉切りと植菌 ・侵入木除伐と外来種の観察・除去 ③ 6/18（土）～19（日） ・古道「芦ノ田峠」のフットパス歩き ・芦ノ田湿原のモニタリング ・初夏の生き物調べ	・5/21 麗澤中学 （樹木観察会）	エコビレッジプロジェクト 4/2（土）総会 セミナー 4/6（水）幹事会 5/6（水）幹事会 6/1（水）幹事会 6/26（日）武尊山 山開き
7月 ～ 9月	④ 8/6（土）～8（月） ・ススキの刈り とマルチ利用 ・野焼き用「防火帯」づくり ⑤ 9/24（土）～25（日） ・キノコ教室とキノコ原木伐採 ・初秋の生き物調べ（ミズナラ林） ・初秋の草原を楽しむ（お月見とお茶会）	・7/21 麗澤中学校 ・7/27 川越小学校 ・8/10～14 市川ボー スカウト団 ・8/20 三番瀬 s/c へ	7/6（水）幹事会 8/17 諏訪神社祭り 8/20 藤原区民祭 9/7（水）幹事会 9月中 学習会①
10月 ～ 12月	⑥ 10/22（土）～23（日） ・茅刈り & 講習会・検定 ・秋の生き物調べ ・キノコ原木伐採 10/24（月）～28（金）（茅刈り・平日プラン） ・「流域コモンズ」交流会 ・星空観賞会 ⑦ 11/12（土）～13（日） ・茅刈りと茅の運び出し ・割り薪づくり ・「山の口終い」行事	早稲田環境塾と のコラボ合宿 （日程調整中）	10/5（水）幹事会 11/2（水）幹事会 11月中 学習会② 12/7（水）幹事会
1月 ～ 3月	⑧ 2/11（土）～12（日） ・かんじき雪原トレッキング ・「雪掘り」お助け隊 ・地域の食文化を学び味わう		1/11（水）幹事会 1月中 学習会③ 2/8（水）幹事会 3/7（水）幹事会

『飲水思源』の実践 = 原風景と生態系サービスを大切にする ⇒ 流域コモンズの形成



◆新規プロジェクト「藤原エコビレッジ」

—古民家を中心に里山の環境再生と持続的なライフスタイルの提案を試みます—

担当幹事（北山郁人）

活動イメージ

- 1、一畝田の古民家を中心に、周辺の環境を持続的に利用しながら、生活できる仕組みを考える。基本は、電気、ガス、石油、のなかった時代の生活を基本とするが、現代のテクノロジーも組み合わせて、新しいライフスタイルの構築を目指す。
- 2、一畝田の古民家を中心として、周辺の環境調査（地元学）をおこなう。田んぼ、畑、雑木林、川、用水路、道、生き物など。
- 3、上記の暮らしを持続させるために、都市住民との交流を通じ持続的に管理していく。

2011年度活動予定

プロジェクトの活動拠点となる一畝田の古民家を整備する。

- 利用するにあたり、必要な整備をおこなう。
- 地域の素材や材料を生かし、可能な限り手作りでおこなう。

活動拠点周辺の環境調査（地元学）

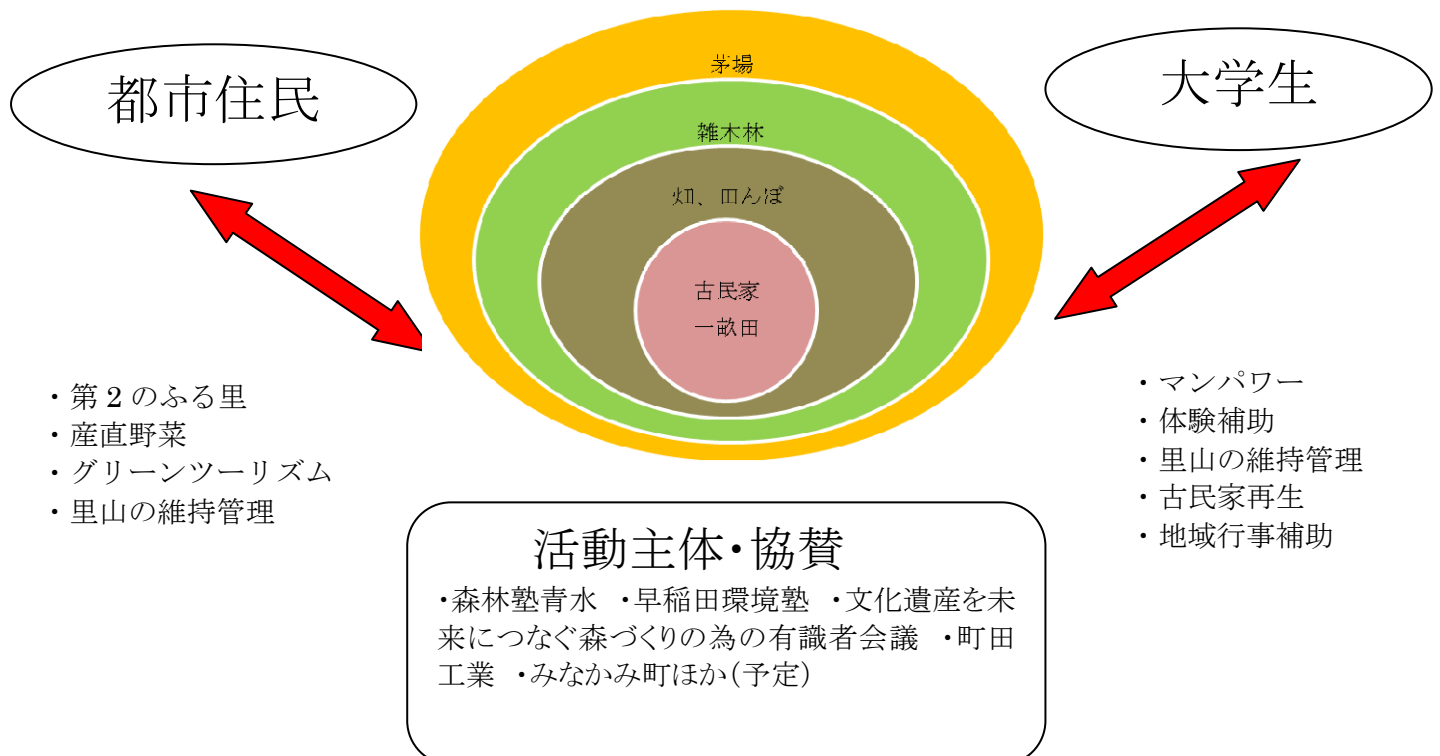
- 活動拠点を中心とした生き物調査
- 建物の周辺の環境も含め、暮らしとのつながりを調べる
- 暮らしにまつわるエピソード、思い出、建物の歴史など聞き取り調査

冬場の雪ほりの協力、支援活動

- 安全講習会
- 放置されている物件等、雪の重みで建物が傷まないよう最低限の除雪作業の支援活動をおこなう。
- 要請があれば、他の一般住宅も雪ほり支援をおこなう。

古民家、里山再生にかかわる団体とのネットワークをつくる。

- 他団体の主催するセミナー、講演会、ワークショップへの参加
- 古民家や里山再生にかかわる団体の調査、コンタクト、情報交換をおこなう。
- 保存民家や文化財の見学、先進地視



◆日本自然保護協会(NACS-J)第10回沼田眞賞
授賞式・記念講演会:報告 幹事(稲 貴夫)

ご承知の通り、森林塾青水は NACS-J の本年度(第10回)沼田眞賞を受賞しました。「茅場の再生と活用による文化と生物の多様性保全」が授賞理由で、去る1月22日(土)の午後、東京都江東区の清澄庭園・大正記念館で授賞式と記念講演会が開催されました。約百名の来場があり、本会からも清水塾長はもちろんのこと、原、安楽、笹岡の各顧問をはじめ会員約20名が出席し、結成10年を経た青水にとって思い出に残る式典となりました。その概要を紹介します。



授賞式では NACS-J の田畑理事長の挨拶に続いて、亀山選考委員長が選考理由を述べた後、沼田眞賞が授与されました。受章者は本会の他、佐々木克之氏、NPO 法人「こんぶくろ池自然の森」の二団体・一個人で、清水塾長は壇上にて田畑理事長より、賞状と副賞のデジタルカメラの授与を受けました。(写真)



続いての記念講演では、塾長が「『飲水思源』元・入会山の再生と活用ー活動の報告と今後の課題についてー」と題して、約一時間講演しました。

塾長は青水の活動について、〈飲水思源〉〈入会〉〈草地・草原〉〈今日的利用〉〈流域コモンズ〉の五つのキーワードを提示し、フィールドである藤原の位置と環境を紹介した上で、10年にわたる茅場を中心にした活動について報告しました。そして、今日的課題である

生物多様性の問題について、これまでの体験から、
・命のつながりの多様性 ・人と自然のつながりの多様性
・地域とのつながりの多様性 ・死なばもろともの世界、
として捉えていることを披露しました。最後に、これからの10年に向けて、次世代の担い手の確保などの諸課題に触れ、さらに茅の利活用、都心・フィールド間の交通、事務局スタッフの拡充という具体的問題についても報告し、来場者に協力を呼びかけて講演を終えました。限られた時間の中であり、清水塾長が「語りそびれたこと」もありました。その部分については編集後記をご覧ください。



他の受賞者の記念講演について、次に紹介します。佐々木克之氏は「河川から沿岸・干潟にいたる物質循環の研究と自然保護への貢献」が授賞理由です。佐々木氏は三河湾一色干潟での研究をもとに、干潟が有機物を分解し、窒素やリンを減らすことを量的に明らかにし、三番瀬の埋め立てや諫早湾の問題について重要な提言を行ってきました。講演では、シロザケとサクラマス放流について、両者は生態が異なることから、ダムが建設されると、サクラマスは放流を続けても減少してしまうことや、浚渫土砂や産廃の埋め立てが沿岸漁業の衰退を招いていることに言及し、「持続的な開発」よりも「持続的な利用」が大切であるとする沼田眞さんの言葉を紹介し、講演を終えました。

NPO 法人「こんぶくろ池自然の森」は「こんぶくろ池湿地の調査・保全活動を通じた自然博物公園の実現」が授賞理由です。森和成会長が「こんぶくろ池自然博物公園」の自然と保全活動、今後の課題について講演しました。「こんぶくろ池自然博物公園」は千葉県柏市にあり、広さは18.6ヘクタール。湧水による二つの池と里山を中心に、多様な動植物が生息しています。しかし、五年前までは大量のゴミが不法投棄され、人も寄りつかなかったということです。そんな状況から同法人の取り組みが始まり、今では産官学民の連携による公園整備保全活動が取り組まれています。しかし課題はたくさんあり、今回の受章を契機に、さらに多くの人々に理解と協力を呼びかけていきたいとのことでした。

記念講演終了後は、主催者と受賞関係者との懇親会が開かれ、相互に交流を深める機会となりました。

◆沼田賞受賞記念「草原再生セミナー：生物多様性の地域戦略を考える」：報告幹事（海老沢秀夫）

◆道家哲平講師（日本自然保護協会/保全研究部）

COP10で決まったこと

「市民の手で地域戦略を作ろう」

名古屋COP10で「愛知ターゲット（新戦略2011－2020）」が採択された。ミッションは、「2020年までに生物多様性の意味と価値をすべての人が理解し、社会の常識となるようにしよう。そして生物多様性の損失を止め、回復力のある生態系を確保しよう」だ。「愛知ターゲット」は、今後10年間の生物多様性保全の「世界戦略」の方向性を示すもので、各国政府の「国家戦略」や、自治体を作る「地域戦略」の基本モデルでもある。

生物多様性の損失を止めるために「愛知ターゲット」では、20の短期目標をたてた（表参照）。私たち市民活動のチェックリストとしても役立つ内容を含んでいる。市民としてどう活用し具体的な戦略づくりに活かしていくか、NGOの役目はこれからだ。

自然保護協会では今年から、「市民が作る地域戦略」をキーワードに事業を展開する。市民の手で、生物多様性を活かした人づくり、地域づくりの事業をやりたい。人と地域資源は、生物多様性の保全を考えるうえで重要なポイント。愛知ターゲットの成果を、ぜひ今後の多様性保全の力にしたいと思う。

参考：愛知ターゲット 20の目標

5つの枠組み	20の目標	内容
A 間接的な要因	1 認識	多様性の価値と持続可能な利用のための行動を認識する
	2 政府計画	多様性の価値を国の会計制度などに組み入れる
	3 有害措置	有害な補助金などを廃止する
	4 行動	政府や企業が行動を起こす
B 直接的な要因	5 損失速度	森林など自然生息地の損失速度を半減させる
	6 漁業	乱獲を避け、安全な範囲で操業する
	7 農林業	多様性を保全しながら保全する
	8 過剰栄養	有害にならない水準に抑える
	9 外来種	侵略的外来種を抑制し、根絶する
	10 気候変動	人為的圧力を最小化する
C 状況の改善	11 自然保護区	少なくとも陸域17%、海域10%をめざす
	12 絶滅危惧種	種の絶滅を防ぎ、減少種を保全する
	13 遺伝多様性	作物や家畜について多様性を維持する
D 恩恵の維持	14 公平なアクセス	水など不可欠な生態系サービスを提供する
	15 生態系回復	悪化した生態系の15%以上を回復する
	16 ABS	名古屋議定書を国内法で施行し、運用する
E 取組の強化	17 国家戦略	効果的で参加型の最新の国家戦略をたて実施する
	18 伝統的知識	先住民と地域社会の知恵を尊重し、保護する
	19 科学技術	多様性についての知識、科学技術を共有する
	20 資金	戦略を効果的に実施するため、顕著に増やす

出典：伊藤智章（2011）地球生きもの会議を振り返る、森林環境2011（森林文化協会）を改変



ご講演をいただいた出島さん(左)と道家さん

◆出島誠一講師（日本自然保護協会/赤谷プロジェクト担当）

赤谷プロジェクト

「生態系サービスを地域社会につなごう」

プロジェクトの発端は、80～90年代のスキー場とダム計画。うまい水を守りたい、温泉の原水を守りたいと1990年、「新治村の自然を守る会」が結成された。自然保護協会との猛禽類調査などを通して計画は中止となったが、地元にはダムやスキー場に代わる地域づくりは何かという課題が残った。自然保護協会も、「自然を守った」で完結してしまう自然保護のあり方への疑問があった。国有林でも森林の「公益的機能」重視への政策転換があった。

04年に協定が結ばれ、①赤谷プロジェクト地域協議会、②日本保護協会、③林野庁・関東森林管理局の3者による「赤谷プロジェクト」が始まった。正式名称は、三国山地／赤谷川・生物多様性復原プロジェクト。生物多様性の保全と持続できる地域社会づくりが目標だ。3者による「企画運営会議」と、会議の方針決定の科学的根拠を提供する「自然環境モニタリング会議」からなっている。

自然環境モニタリングでは、クマタカとイヌワシの繁殖調査、50地点に設置したセンサーカメラによる動物相の調査、糞によるテンの食べ物調査などを行っている。生態系復原事業では、治山ダムの撤去が注目をあびた。今進めているのは自然林の復原プログラム。地域全体で3割ある人工林を1割に減らし、自然林に戻そうと研究中だ。

生態系サービスを社会にどう具体的につなげるか。新しい自然保護の重要な課題だが、最近大きな成果があった。法律では森林管理局が作ることになっている赤谷の森「管理経営計画書」が、NGOなどの住民参加で作成されたことだ。国有林を、地域社会とともに保全管理するモデルになる事例だと思う。他地域でもぜひ取り組んでいきたい。みなかみ町でも新しい自然保護のモデルを作って発信してほしい。生物多様性の「地域戦略」は、そのためのよいツールになるだろう。

■ 2010 年度講座「コモンズ村・ふじわら」⑦ —カンジキで雪原トレッキングと「ぼた」づくり—

毎年大好評のカンジキ雪原トレッキングと郷土食「ぼた」づくり。今年も快晴に恵まれて、2月19日～20日の2日間にわたり開催。雪原の足跡ウォッチングや「ぼた」づくりを堪能しました。惣一郎先生と民宿「樹林」の千恵美ママ、美穂さん、美裕さん、皆さんお世話さまでした。(編集子)



◆だんだんと 恋心わく 上の原 大地のいぶきが私を呼ぶ …雪の藤原集落の情景…

古高利男

冬は雪。雪の中のお正月。北海道産まれの私にとって、雪のない冬・お正月は「米こうじの香りのしない日本酒」のようなものだ。

「真っ白な雪原上に七人の
カンジキの跡ヤッケがゆれる」

上毛高原の雪はまだら。しかし、藤原地域に入ると、たっぷりの雪。太陽を反射してまぶしい。家も、畑も川も、すっかり雪の中に埋まっている。「いい感じだー」

上ノ原に着くや、「オオー！」と感嘆の声をあげてしまった。「雪原」のイメージが故郷とピッタリだった。検定を受けた茅場は、すべて真っ白な雪、足跡ひとつない雪、に覆われている。中腹の3本のヤマハンノキがなければ、まったく距離感がない。

早速、カンジキをつけて歩き出す。このカンジキは、藤原集落の古老の製作だという。材は二次林として生きるアブラチャン(クスノキ科)。油成分が多く、丈夫な



のだ。靴にとりつけるのは、いたって簡単だった。ロープ1本が生き物のように2つの物体を結びつける。スノーシューより、軽く歩き易い。

どこを歩いてもいい。みんな思い思いに歩き始める。14列の足跡を後ろに残して、樹林帯に向かう。赤や青のヤッケが雪原に揺れる。白のキャンパスに絵を書き始めたのだ。

おっと、先人の足跡を発見。うさぎ？きつね？ふり向けば、白き神々の山、谷川連峰。

真っ青な空に、飛行機雲がぐんぐん成長していく。

…雪原のど真ん中でかまくらを作り、そこで1泊するのはどうだろう？雪の上に寝そべって、満点の星をみながら、暖房用に赤ワイン片手に持って…、子どもたちをここに連れてきたら、よろこぶだろうな…

色々な思いを浮かばせてくれる雪は、天からの贈り物。



「見上げれば熊棚があるコゲラ・エナガ
キバシリ走るミズナラの森」

「例年の半分の雪ダナー」と語る民宿「樹林」(キリン)の主。後をついて、すぐそばの森へ行く。「ほうら、あそこにも、あそこにもある、熊棚だ。」「枝先にある実を、枝ごと引っ張って食べ、枝は尻の下に敷くんだ。」「敷けば、棚は安定する。利口なもんさ、熊のやつ。」

見上げれば、高い木の上に枯れ葉が積み重なっている。それが、いくつもみえる。＜あんな細い先に？＞＜熊って、重いんじゃないの＞と、不思議がる我々。「熊は、夜行性だからな。夜は、危なくて、歩けネエ。」「民宿と熊棚は、目と鼻のさき。「熊のやつ、利口だから、畑の回りに電気を通して、その下に穴を掘って、入っちゃう。」「去年は、1頭、オリでとった。」

夜は熊のテリトリーになるミズナラ林は、昼間は野鳥の天国である。幹から幹を飛び交い、忙しそうに虫を探し・食べ、次へ移っていく。コゲラは愛嬌者、エナガはぬいぐるみのよう。上下を自在に動き回るキバシリとは、やっと2回目の対面だ。

昼も夜も、動物の動く山村。そこでは、人々は、動物と共にくらしているのだった。

「胡桃割りご飯にぬってボダ作り
炭火の前で聞く古老の話」

昔、私の家の庭に、1本の大きなオニグルミの木があった。毎年たくさんの実をつけた。緑の外皮を腐らせてから殻を割り、中の実をとる。子どもの頃はおやつがわりだった。石の上にクルミを置き、大きめの石を打ち下ろす。「ぐじゃっ」と割れた中から、実をみつける。爪楊枝は釘だった。釘でほじくって食べる。時々、殻もかんでしまう。釘の冷たい感触は、今でも歯に残っている。

古老は、集めたクルミを火であぶり、割れ目を出してくれていた。それを「くるみ割り器」という鉄製の器具(1個 2, 3 千円もするという)に載せて、「えい」と割っていく。2 つに割れたクルミの実には H 型。その実を千枚通しでほじくりだす。230 個あまりのクルミから、やっと手の平に大盛り分がとれた。それをすり鉢で擦り、みそ・砂糖を混ぜていく。すかさず「人生ゴマスリ」「ミソをつけるのも人生」と、ヤジが入る。



大判・小判型のおにぎりの表面を焼いて、竹串に刺す。この竹串は、沼田産。なぜなら、「ここには、竹林はない」という。竹串には上下があって、短い方におにぎりを刺す。長い方は支柱として使う。味噌と砂糖で味付けをしたクルミをおにぎりにぬり、炭火で焼くとボダの出来上がりだ。

古老が持ってきた炭火は、工夫と年季の入ったものだった。先代から使っているという植木鉢を利用した火鉢は、割れ目を針金で補強してある。その回りを、たくさんの穴の空いた板で囲む。穴は、竹串を刺す穴。ボダの焼け具合で場所を自在に替えられる。その穴は、一つ一つ大きさが違う。竹串の太さがちがうからだ。穴はすべて斜めを向く。この火鉢とボダを立てる板は、工夫と生活の知恵の集合体だった。そして、炭や米・クルミはこの自然が育てたものだ。

ボダを焼く一時は、語り部古老の話を、「なるほど」「そうなんだ」と頷きながら聞くまとない時間になった。次々と出てくる話には、生活苦と汗と工夫とともに山村の豊かさを垣間見る思いだった。

1泊2日の40年ぶりの雪国生活を体験した。雪は昔と変らぬ白さだった。古老の話は、自然の中に溶け込んでいるようだった。山のめぐみ・自然との一体感・生活の知恵・人情・助け合いなど、久しく忘れてたものが「ここにあるじゃないか」という驚きの2日間でもあった。



◆棚から「ぼた」もち一たな「ぼた」

高橋志津子

地域の食文化を学び味わおうと、藤原の郷土料理「ぼた」づくりに 2 月 19 日、20 日と参加しました。

20 日朝、大幽トレッキングと「ぼた」づくりの 2 班に分れて、「ぼた」づくりは 3 人ですと惣一郎さんに報告すると「3 人じゃ出来ない」と即座に言われ、全員が「ぼた」づくりに挑戦することになりました。

惣一郎さんのお孫さん 2 人と千恵美さんと森林塾の 6 人で作業が始まりました。(浅川さん、海老沢さん、北山さん、町田さんは 19 日の日帰り参加でした)

1. 1. くるみ味噌を作る。 くるみ割り器を使いくるみを

割る、実をほじくって取り出す。これをひたすら繰り返します。ある程度の量(握り拳よりやや多め)になったら大きなすり鉢に入れてすりまします。ポイントは床に腰をおろし、すり鉢が動かないように両足でしっかりとさむことです。しかし、なかなか滑らかになりません。腕はだるくなってくるし、弱音は吐けないと思っているうちにやっとなりとなり、なんとか OK が出ました。味噌を入れ(適量だそうです)、さらにすり混ぜ、砂糖(これも適量)を入れ、又





すり混ぜて仕上がりです。これを2回しました。使ったくるみをお孫さんと数えると・・・、なんと230ヶ！

2. ご飯を炊く。ご飯を炊き、熱いうちにつぶし、厚さ2cm位の小判型あるいは円盤状にします。それに、惣一郎さん特製の「ぼた専用」竹串をさし込み、表裏にくるみ味噌を平らに



塗ります。

3. 炭火で焼く。火鉢が優れ物です。火鉢の周囲にはめ込まれた板があり、串をさす穴を開け、更に串が火に傾くように斜めに削ってあります。その穴に「ぼた」を串ごとさし込んで焼きます。鮎などを焼くように、遠火でこんがり両面を・・・できあがり!! よい香りがして『くん、くん。くん』と鼻が動きます。

朝、「3人じゃ出来ない」と惣一郎さんに言われた意味がわかりました。こんなに手間がかかるのですね。そして、2人のお孫さんの手際の良さは流石です。「いただきます」「ごちそうさま」を実感しました。たな「ぼた」というわけにはいきませんでした。(´ー`)

火鉢のそばで、アツアツの「ぼた」の味見をしました。口の中で、ほっほっところがしながら食べる幸せ。子どもになったようでした。

以前この地域の豆腐は固かったので、豆腐を串にさし、くるみ味噌をつけて囲炉裏で焼いて食べたそうです。なんと贅沢な。豆腐の田楽は高級料理です。

ロッジ「樹林」の皆さま、特に2人のお孫さん、ありがとうございました。おかげさまで心も身体も温まりました。



◆ 「会員・会友」便り

◆ 古民家再生奮闘記 その⑤

北山郁夫



休みの度にみなかみ通いだっただけ、引越しの荷造りは全くと言っていいほどできていませんでした。妻の実家に前泊し子どもたちが寝ている朝方にトラックを借り、いざ引越！友人たちにまとめきれなかった荷づくりから手伝ってもらい、なんとか夕方までには積み込み完了。その日のうちに荷物を降ろしてトラッ



クを返し、子どもたちを迎えにいく・・・もうふらふらです。山積みされた段ボール。様々な家具。これをひとつひとつ片付けてから、まだまだ残るリフォーム作業を始めよう・・・今までの強攻作業をしばし休めて、段ボールを紐解きながら少しのんびりしたくなりました。

引越して一番大きな荷物・・・それはドラムセット！2階には古道具が所狭しと並べられていましたが、小部屋が3つあり1つは倉庫にし、もう1つにドラムとギターとアンプを並べて音楽部屋をつくりました。茅葺の家からロックが流れる?!ま、それもおもしろい・・・季節は春。とりあえず引越しができた安堵と、雪解けとともにまったりと過ごす4月でした。

5月から新たな仕事に就くことができ、子供達も保育園に入園。妻もパートを始めました。作業ペースが落ちましたがGWに入り、いよいよ水回り(台所、風呂場、洗面所、トイレ)の解体を始めました。床、天井、壁と剥がせるところは全部はがしたため、トイレは壁なし丸見えに。洗濯機とお風呂もブルーシートで囲って外にだしました。台所は完成までの約3か月間、食事の支度をリビングのテーブルの上でカセットコンロとホットプレートで作り、洗い物は仮設の洗面所で行いました。家事の負担が増えて妻には申し訳ないところですが、露天



風呂は大好評！夜桜に、月明かり、満点の星、そして雪見風呂・・・と雪が降るぎりぎりまで楽しみながら入ることができました。

ここでの生活はまさに日々奮闘・・・なんとか生活のリズムができたとはいえ、子育てに日常の生活に仕事にリフォームにと毎日があつという間に過ぎていきます。春には桜を愛でながら鯉のぼりをかかげました。夏には



はお祭りや獅子舞に参加。秋には紅葉に囲まれながら茅刈りにく



るみ拾い。四季の移り変わりを楽しみながら、作業はゆっくりと、でも少しずつ形になってきました。冬直前によりやく内風呂が完成。薪と灯油の両方で沸かせるようにし、台所にも薪ストーブを置きました。薪の火はとても温かくお湯も柔らかく感じます。このあたりは唐松が多く、また薪に最適な広葉樹も豊富。不要な間伐材などを大量にもらいうけ、雪が降りだすまで薪割りに精を出しました。そしてまた冬がやってきました。一晩で車が埋まってしまうほどの雪が降る日もあるので、思いきって中古の除雪機を買いました。年末年始に帰省しその後帰宅するとその除雪機と軽トラがすっぽり隠れるほど積も

っていました。

日本の四季はまさに春夏秋冬それぞれの色と顔を持ちます。昔はどこにいても感じたであろう自然の変化を今感じるのには難しいこと。それをここでは体感できる。夜になれば外灯もなく本当にまっ暗！それでも天の川や満天の星を楽しみ、月夜には月の本当の明るさを感じる。春になれば山野草にあふれ、秋には一面の紅葉に山は色づく。冬は2メートルを超える雪に埋もれながらもその自然と遊ぶこともできる。そんな過酷？な環境ではありますが、「スローライフイズハードライフ」が実はちょっぴり贅沢・・・そして、この環境こそが何よりの財産かなと感じています。「パパのお手伝いをする」のが将来の夢と語る息子。2歳のおぼつかない手つきで、薪運びを手伝う娘。なかなかたくましくそして心強く育っているわが子たちの成長とともに、北山家の古民家奮闘記はまだまだ続きます。



◆ 参加者募集のご案内

2011 年度・第2回講座「コモンズ村・ふじわら」



上ノ原は人と生き物の入会地
講座「コモンズ村・ふじわら」2011

参加者募集



第2回 草原の生き物調べ、原木キノコの菌打ち、青木沢峠のフットパス歩き

森林塾青水は茅場（ススキ草原）と薪炭林（ミズナラ林）、古道、古民家など、水源地域の自然・文化資源の再生と活用に取り組んできました。講座「コモンズ村・ふじわら」はその実践プログラムです。

8年目の今年は、これまでの経験と成果をふまえ、地域資源の恵み（生態系サービス）を持続的に利用する仕組み「流域コモンズ」の構築活動に入ります。今回は、草原の生き物調べと外来種対策、原木キノコの玉切りと菌打ち、ブナ林の新緑が美しい青木沢峠フットパス歩きを楽しみます。[参加者を募集します](#)。

- 日程 5月14日（土）～15日（日）
- 集合 初日の10時20分、JR上毛高原駅改札口
〈上越新幹線〉東京 8:52—上野 8:58—大宮 9:18—高崎 9:52—上毛高原駅 10:14
- 参加費 10,000 円（森林塾青水正会員・準会員は 9,000 円、学生会員は 6,000 円）
※宿泊費、食費（夕食・朝食・昼食）、保険代などを含みます。初日の昼食は各自持参して下さい。現地までの交通費は自己負担です
- 宿泊 ロッジ「雪割草」／群馬県みなかみ町藤原5536-1（0278-75-2217）
- 服装など 野外活動に適した服装（長袖、長ズボン、軍手など）。その他、水筒、雨具、カメラなど
- 申し込み・問い合わせ 森林塾青水事務局・コミュニティデザイン（浅川潔）／東京都中央区湊1-2-3-301
【ファクス】03-6228-3504、【メール】info@commonf.net
- 当日・緊急連絡先 草野携帯（090-3390-8406）
又は清水携帯（090-3575-2283）

締切日4月28日

第1日目 5月14日（土）

時刻	内 容	備 考
10:20	上毛高原駅集合	
11:00	上ノ原「入会の森」へ ～ 野焼き後の草原の散策・観察	
12:00	昼食・休憩（弁当は各自ご持参下さい）	
13:00	・ススキ草原の生き物調べと外来種の抜き取り ・ミズナラ林で原木キノコの玉切りと植菌	海老沢リーダー 草野リーダー
16:30	民宿へ	
18:00	夕食～交流会	ロッジ「雪割草」

第2日目 5月15日（日）

時刻	内 容	備 考
7:00	朝食	
8:30	青木沢峠フットパス歩き（新緑のブナ林）	海老沢リーダー
12:00	昼食	レストラン「幸新」
13:30	解散 → たにがわ416（15:19上毛高原駅発）	

□ 編集後記 ～塾長のつぶやき～

○上ノ原「善玉キーストーン種」宣言 1月22日。第10回「日本自然保護協会沼田真賞」授賞式。サンワみどり基金時代からの大恩人・沼田先生の名を冠した賞をいただくことになり、真に嬉しい限りだった。

記念講演をやれと言われて困ったが、ご恩返しのつもりで『飲水思源』～元・入会山の再生と活用』と題して、これまで10年の活動実績ならびに課題を報告し、今後のご指導ご支援をお願いした。キーワードを飲水思源、入会(いりあい)、草地、今日的利用、流域コモンズの5つに絞ったまでは良かったが、初めてパワーポイントなる文明の利器を使ったこともあり時間配分を誤り、肝心のことを語りそびれてしまった。

それは、「我々は、少なくとも上ノ原というフィールドでは善玉キーストーン種であり続けたい」という思い。かつて里山において先人たちがそうであったように、上ノ原「入会の森」を賢く利用し、草木や動物たちにとっても住みよい生態系を保っていく。その要石になる、という覚悟だ。

その思いを込めた書初め(写真)をせっかく持参したのに、披露出来ずに終わってしまった。悔しいので、この場をかりてあらためて「善玉キーストーン種」宣言をし、その実行を沼田先生にお誓い申し上げたい。人と生き物が入り合うコモンズ村・ふじわら、万歳！



○『飲水思源』の里帰り 森林塾青水の合言葉『飲水思源』。井戸を掘ってくれた人の恩を忘れてはいけない、という先人の訓え。現代流に言えば「水道の蛇口をひねって水を飲んだら、その先の水源の森やダムに思いを馳せ感謝すべし」ということ。元をただせば、北周時代の詩人・庾信の詞「その実を落とす者はその樹を思い、その流れに飲む者はその源を思う」に基づく故事成語。

その『飲水思源』の4文字をあしらったエコバックの在庫はないかと、早稲田環境塾・吉川プログラムオフィサーから問合せが入った。1月28日開催の「中国環境問題研究会」の招聘講師・陳金陵女史(中国環境報社)へのお礼の印としたいとの思召し。当塾10周年記念に作成した在庫が残っていたので持参し贈呈申上げた。(写真)後日、陳女史を空港まで見送った吉川さんから「陳さんは大喜びで早速、荷物を入れて肩に担いでお帰りになりました」とのお知らせ。

かくして、“残りものに福あり”で、中国より渡来の『飲水思源』が里帰りとなった次第。因みに、陳さんのご出身地は南京、勤務先は北京。そして、庾信の生きた北周の都は長安、今の西安。勿論、陳さんが『飲水思源』に出会ったのは東京である。



○大震災に文明のあり方を思う 想定外だったと言う東電・政府・関係者に対し、想定されていたという説もある東日本大震災。大地震と津波だけで原発事故がなかったら、これほどまでの事態にはならなかった。

では、原発は何故必要になったのか。人類がはびこりすぎたからではないのか。快適・便利を追い求め、余剰価値を追求し続けてきた。緑の大地はみるみる失われ、人口は自己増殖激増し、石油、石炭、水力だけでは賄いきれなくなった。つまり、地球という生命体の環境容量を超えて人類が膨張し過ぎてしまった。そこで将来をみこして、CO2を出さない原発に頼った。そして今、人が作った文明の利器を人が制御出来ない事態に直面している。

此度の事故は天災であり、人災でもある。人類は今、有史以来の文明のあり方、環境容量を超えない暮らしのあり方につき再考を促されている。人以外にも失われた数えきれないほどの生き物たちの命と棲みかを回復し共存できる道。暮らしの価値基準を見直し、GNHを国とするブータンや環境立国を旨とするコスタリカなどの“先進文明国”に“経済先進国”が学ぶ時ではないか。

小生が社会人になった1964年、既に3種の神器が揃っていて暮らしは十分に便利・快適であった。それ以降はすべて『余剰価値』であり、その結果『環境容量』を超えてしまった。本質的問題は、人類が環境容量の範囲内で如何にして持続的な暮らしの有り様を再構築するかだ。それが後世、人類が善玉キーストーン種として他の多くの生き物仲間たちから尊敬されうる存在になり得るか否かを決定する。

<世界中みんなはらから桜咲く>

(青)